# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

# 磁界・電圧源強連成解析と時間領域随伴変数 法の併用によるかご型誘導電動機のマルチマ テリアルトポロジー最適化に関する研究

# 平田, 竜一朗 / Hirata, Ryuichiro

(出版者 / Publisher) 法政大学大学院理工学研究科

(雑誌名 / Journal or Publication Title) 法政大学大学院紀要.理工学研究科編

(巻 / Volume) 65 (開始ページ / Start Page) 1 (終了ページ / End Page) 6 (発行年 / Year) 2024-03-24

(URL)

https://doi.org/10.15002/00030717

# 磁界・電圧源強連成解析と時間領域随伴変数法の 併用によるかご型誘導電動機の マルチマテリアルトポロジー最適化に関する研究

# STUDY ON MUTI-MATERIAL TOPOLOGY OPTIMIZATION OF SQUIRREL-CAGE INDUCTION MOTOR USING STRONGLY COUPLED ANALYSIS OF MAGNETIC FIELD/VOLTAGE SOURCE AND TIME DOMAIN ADJOINT VARIABLE METHOD

平田竜一朗 Ryuichiro Hirata 指導教員 岡本吉史

# 法政大学大学院理工学研究科電気電子工学専攻修士課程

In recent years, to prevent global warming, higher efficiency of motors is required. Although IMs have inferior output compared to interior permanent magnet synchronous motors, they have advantages such as robustness, low cost, and self-starting characteristics, so they account for approximately 41% of the total domestic production of AC motors. A design optimization method that combines electromagnetic field analysis and topology optimization (TO) has been proposed as one method to improve the efficiency of IMs. When this method is applied to IMs, it is considered that including the secondary conductor in the design domain in addition to the rotor core is the way to further improve the performance of IMs. In addition, because IMs have many secondary conductors in the rotor, and there is slippage, the magnetic field inside the motor changes rapidly. Therefore, to accurately consider electromagnetic phenomena, it is necessary to perform TO based on magnetic field analysis and strongly coupled analysis of voltage sources. Therefore, in this paper, we apply multi-material TO based on magnetic field analysis and strongly coupled analysis of voltage sources with high torque and low torque ripple are obtained.

*Key Words* : Multi-material topology optimization, squirrel-cage induction motor, strongly coupled analysis of magnetic field and voltage source, time domain adjoint variable method

# 1. はじめに

近年,地球規模で進行する温暖化を防止するため,様々 なカーボンニュートラルアクションが導入されている. その一つとして,鉄道,自動車,工場などで利用される 電動機の高効率化が挙げられる.電動機には様々な種類 があるが,有力な電動機として誘導電動機がある.誘導 電動機は内部埋込式永久磁石同期電動機と比較して出力 は劣っているが,堅牢,安価,自己始動特性などの利点 があることから産業用電動機として広く利用されてお り,交流電動機の国内総生産量の約 41 %を占めている <sup>(1)</sup>. 2013 年には誘導電動機がトップランナー制度の対象 機器として定められ,更なる高効率化が求められるよう になった<sup>(2)</sup>.

誘導電動機の高効率化実現の一方策として、電磁界解 析とトポロジー最適化を併用した設計最適化手法が提案 されている<sup>(3)</sup>. この手法を誘導電動機に適用する場合,回 転子鉄芯のみを設計領域とすることが多いが,設計変数 が少なくなる分,高性能な構造を得る可能性は低くなる. そこで,更なる性能向上を目指す方策として,回転子鉄 芯に加えて二次側導体のトポロジー変化も考慮すること が考えられる.

誘導電動機の二次側導体のトポロジー変化を考慮した 最適化設計の報告例はあるが,性能評価のための解析に は電流源入力の有限要素法を用いており,一次側コイル に鎖交する磁束による誘起電圧の考慮がされていない<sup>(4)</sup>. 誘導電動機は回転子に多数の二次側導体を有しており, すべりもあるため,電動機内部の電磁界は,時空間方向 に対して急峻に変化する箇所がある.したがって,電磁 気現象を高精度にシミュレートするためには,磁界・電 圧源の強連成解析に基づくトポロジー最適化を行う必要 がある.

そこで本論文では,有限要素法を用いた磁界・電圧源 の強連成解析と時間領域随伴変数法を用いた設計感度解 析に基づく,マルチマテリアルトポロジー最適化をかご 型誘導電動機へ適用し,高トルク化,低トルクリップル 化を図った.その結果,かご型誘導電動機の回転子鉄心, 二次側導体の構造が大きく変化し,トルク特性が大幅に 向上する回転子構造が得られたので,その子細を報告す る.

# 2. 解析·最適化手法

# (1)磁界・電圧源強連成解析

かご型誘導電動機の性能を評価するために、本論文で は二次元有限要素法<sup>(5)</sup> (2D-FEM)によって、磁界・電圧 源強連成解析を行った.

二次元磁界解析の支配方程式にガラーキン法を適用し た定式を次式に示す.

$$G_{i} = \iint_{\Omega_{a}} N_{i} \left[ \frac{\partial}{\partial x} \left( v \frac{\partial A_{z}}{\partial x} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left( v \frac{\partial A_{z}}{\partial y} \right) \right] dS$$

$$- \frac{n_{u} i_{u} t_{uz}}{S_{u}} \iint_{\Omega_{u}} N_{i} dS - \frac{n_{v} i_{v} t_{vz}}{S_{v}} \iint_{\Omega_{v}} N_{i} dS$$

$$+ \frac{n_{w} (i_{u} + i_{v}) t_{wz}}{S_{w}} \iint_{\Omega_{w}} N_{i} dS$$

$$- \iint_{\Omega_{e}} N_{i} \sigma \left( \frac{\partial A_{z}}{\partial t} + E \right) dS = 0$$
(1)

ここで、 $\Omega_a$ は全解析領域、 $\Omega_e$ は二次導体領域、 $\Omega_u$ 、 $\Omega_v$ 、  $\Omega_w$ は各相のコイル領域、 $N_i$ は補間関数、vは磁気抵抗率、  $A_z$ は z方向の磁気ベクトルポテンシャル、 $n_u$ 、 $n_v$ 、 $n_w$  は 各相のコイル巻き数、 $i_u$ 、 $i_v$  は u 相、v 相の一次電流、 $S_u$ 、  $S_v$ 、 $S_w$  は各相コイル領域の断面積、 $\sigma$  は二次側導体の導 電率、E は電界を表す.また、 $t_{uz}$ 、 $t_{vz}$  は各相コイル の符号係数を表し、各相コイルの一端は 1、もう一端は-1 となっている。一次側コイルで成立するキルヒホッフの 電圧則を次式に示す.

$$G_{uw} = e_{uw} - R_u i_u - R_w (i_u + i_v) - \frac{n_u t_{uz} l}{S_u} \iint_{\Omega_u} \frac{\partial A_z}{\partial t} dS + \frac{n_w t_{wz} l}{S_w} \iint_{\Omega_w} \frac{\partial A_z}{\partial t} dS = 0$$
<sup>(2)</sup>

$$G_{vw} = e_{vw} - R_v i_v - R_w (i_u + i_v) - \frac{n_v t_{vz} l}{S_v} \iint_{\Omega_v} \frac{\partial A_z}{\partial t} dS + \frac{n_w t_{wz} l}{S_w} \iint_{\Omega_w} \frac{\partial A_z}{\partial t} dS = 0$$
(3)

ここで,  $e_{uw}$ ,  $e_{vw}$  は線間電圧,  $R_u$ ,  $R_v$ ,  $R_w$  は各相の巻線 抵抗, l は積圧を表す. 一次側のコイルは Y 結線を想定 しており, w 相に流れる電流は  $i_w = -(i_w + i_w)$  としてい る. 二次側導体で成立するキルヒホッフの電流則を次式 に示す.

$$G_E = \iint_{\Omega_e} \sigma \left( E + \frac{\partial A_z}{\partial t} \right) dS = 0 \tag{4}$$

(1) ~ (4) 式を連立すると、以下の線形方程式が得られる.

$$\begin{bmatrix} \frac{\partial G_{i}}{\partial A} & \frac{\partial G_{i}}{\partial E} & \frac{\partial G_{i}}{\partial i_{u}} & \frac{\partial G_{i}}{\partial i_{v}} \\ \frac{\partial G_{E}}{\partial A} & \frac{\partial G_{E}}{\partial E} & \frac{\partial G_{E}}{\partial i_{u}} & \frac{\partial G_{E}}{\partial i_{v}} \\ \frac{\partial G_{uw}}{\partial A} & \frac{\partial G_{uw}}{\partial E} & \frac{\partial G_{uw}}{\partial i_{u}} & \frac{\partial G_{uw}}{\partial i_{v}} \\ \frac{\partial G_{vw}}{\partial A} & \frac{\partial G_{vw}}{\partial E} & \frac{\partial G_{vw}}{\partial i_{u}} & \frac{\partial G_{vw}}{\partial i_{v}} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} A \\ E \\ i_{u} \\ i_{v} \end{bmatrix} = - \begin{bmatrix} G_{i} \\ G_{E} \\ G_{uw} \\ G_{vw} \end{bmatrix}$$
(5)

また, (5) 式を行列, ベクトルを用いて表現すると, 次 式のようになる.

$$\left(K + \frac{\partial K}{\partial A}\right)X + C\dot{X} = F$$
(6)

ここで、X は状態変数、 $\dot{X}$  はXの時間微分、K は状態変数にかかる係数行列、 $\partial K/\partial A$  は非線形磁気抵抗率に起因する行列、C は状態変数の時間微分にかかる係数行列、F は電圧源に起因する右辺ベクトルを表す.

# (2) トポロジーのモデリング

設計領域内の材料密度の決定に,次式の連続化ヘビサ イド関数<sup>(6)</sup> を用いる.

$$H(\phi) = \begin{cases} 0 & (\phi < -h) \\ \frac{3}{16} \left(\frac{\phi}{h}\right)^5 - \frac{5}{8} \left(\frac{\phi}{h}\right)^3 + \frac{15}{16} \frac{\phi}{h} + \frac{1}{2} (-h \le \phi \le h) \\ 1 & (\phi > h) \end{cases}$$
(7)

ここで, h は遷移幅を表す.また, ¢ はメッシュの各要素上に定義される設計変数を表し,一次三角形要素の節点上に定義される設計変数,の平均値である.

本論文では、空気、鉄、アルミの3材料で設計領域を 構成するため、設計変数は $\phi$ と $\phi$ の2種類を準備する. 図1にトポロジーモデリングの概念図を示す.図1(a) はモデリング $\alpha$ ,図1(b)はモデリング $\beta$ を示す.モデ リング $\alpha$ の場合、原点の状態から最適化を開始すると、 目的関数の $\phi$ 及び $\phi$ に対する感度は同じ値になってし まうため、 $\phi$ 、 $\phi$ は各最適化反復で同様の変化をする. その結果、設計領域は鉄またはアルミニウムの2材料に しか変化しない.それに対し、モデリング $\beta$ の場合は、 目的関数の $\phi$ 及び $\phi$ に対する感度は異なる値となるため、 正常にマルチマテリアルトポロジー最適化が実行される. このことから、トポロジーのモデリングはモデリング $\beta$ を採用している.設計領域内の磁気抵抗率 $v(\phi, \phi)$ 及び導 電率 $\sigma(\phi, \phi)$ を次式に定義する.

$$v(\phi_{1},\phi_{2}) = \{1 - H(\phi_{1})\}v_{0} + H(\phi_{1})H(\phi_{2})v_{0} + H(\phi_{1})\{1 - H(\phi_{2})\}v_{i}(\boldsymbol{B})$$
(8)

$$\sigma(\phi_1, \phi_2) = H(\phi_1) H(\phi_2) \sigma_{\text{alm}} \tag{9}$$

ここで、 $v_0$  は空気またはアルミニウムの磁気抵抗率, $\kappa$ は鉄の磁気抵抗率, $\sigma_{alm}$  はアルミニウムの磁気抵抗率を 表す.また、 $\{1 - H(\phi_l)\}$ は空気の割合、 $H(\phi_l)H(\phi_l)$  はアル ミニウムの割合、 $H(\phi_l)\{1 - H(\phi_l)\}$  は鉄の割合を表してい る.



Fig. 1. Conceptual diagram of modeling of topology. (a) Modeling  $\alpha$ . (b) Modeling  $\beta$ .

# (3) 時間領域随伴変数法

本節では,設計感度の算出に用いる時間領域随伴変数 法<sup>(7)</sup> (TDAVM) について述べる.目的関数 W を次式に定 義する.

$$W = \int_0^{t_{\text{max}}} w(\boldsymbol{X}, \dot{\boldsymbol{X}}, \phi_n) dt \tag{10}$$

ここで, tmax は終端時刻を表す. TDAVM において解くべき随伴方程式を次式に示す.

$$C^{T}\lambda(t_{\max}) = -\frac{\partial w}{\partial \dot{X}}\Big|^{t=t_{\max}}$$
(11)

$$\left(K + \frac{\partial K}{\partial X}X\right)^T \lambda(t) - C^T \dot{\lambda}(t) = -\left(\frac{\partial w}{\partial X}\right) + \frac{\partial}{\partial t}\left(\frac{\partial w}{\partial \dot{X}}\right)$$
(12)

ここで, えは随伴変数の時間微分を表す.(11)式は終端 時刻,(12)式はそれ以外の時刻で解くべき方程式となっ ている.設計感度の計算式を次式に示す.

$$\frac{\partial W}{\partial \phi_n} = \int_0^{t_{\text{max}}} \left\{ \frac{\partial W}{\partial \phi_n} + \lambda(t)^T \left( \frac{\partial H}{\partial \phi_n} \mathbf{X} + \frac{\partial G}{\partial \phi_n} \dot{\mathbf{X}} - \frac{\partial F}{\partial \phi_n} \right) \right\} dt \quad (13)$$

以下に誘導電動機における時間領域随伴変数法の計算手 順を示す.

Step 1 本ステップの工程を図 2 に示す. 初期値問題として、(6) 式を t=0 から  $t=t_{max}$  まで X について解き、各時刻における X の情報を保存する. このとき、回転子の回転方向は反時計回りである. 初期値問題では、(6) 式を後退 Euler 法によって時間方向に離散化し、ステップバイステップ方式に基づいて解く. 非線形磁気特性は、磁気特性データ及びニュートン・ラフソン法を用いることで考慮している.

**Step 2** 本ステップの工程を図 3 に示す. 終端値問題とし て,  $X \in (11)$  式, (12) 式に代入し,  $t = t_{max}$  からt = 0まで $\lambda$ について解く. このとき,回転子の回転方向は時計 回りである. 終端値問題では, (11) 式, (12) 式を前 進 Euler 法によって時間方向に離散化し,ステップバイス テップ方式に基づいて解く. 非線形磁気特性は,保存し た X と磁気特性データを用いて $\kappa$  (*B*))を算出することで 考慮している.

**Step 3** Step 2 で得られた*λ* を(13)式に代入することで、 設計感度を求める.

定常状態の物理量を目的関数とする場合,設計感度も 定常状態の感度を求める必要がある.しかし,時間領域 随伴変数法は初期値問題の都合上,初期時刻は0とする 必要があるため,次式のように定常状態の感度∂W/∂¢n |steadyを計算する.

$$\frac{\partial W}{\partial \phi_n}\Big|_{\text{steady}} = \frac{\partial W}{\partial \phi_n}\Big|_{\text{all}} - \frac{\partial W}{\partial \phi_n}\Big|_{\text{transient}}$$
(14)

ここで、 $\partial W/\partial \phi_n |_{all}$  は t = 0 から  $t = t_{max}$  までの設計感度、  $\partial W/\partial \phi_n |_{transient}$  は t = 0 から  $t = t_{min}$  までの設計感度、 $t_{min}$  は 定常状態の開始時刻を表す.



Fig. 2. Conceptual diagram of initial value problem.



Fig. 3. Conceptual diagram of terminal value problem.

# (4) 逐次線形計画法

不等式制約条件を考慮した最適化を行うため,逐次線 形計画法 (Sequential Linear Programming, SLP)を導入す る.最適化反復 (*k* + 1) 回目における目的関数及び不等式 制約を次式に示す.

min. 
$$W(\phi_n^{(k+1)}) = W(\phi_n^{(k)} + \delta\phi_n^{(k)})$$
 (15)

s.t. 
$$g(\phi_n^{(k+1)}) = g(\phi_n^{(k)} + \delta\phi_n^{(k)}) \le g_0$$
 (16)

ここで, g0 は制約指定値を表す.次に,テイラー展開を 用いて(15)式,(16)式を変形すると次式のようにな る.

min. 
$$W(\phi_n^{(k+1)}) = W(\phi_n^{(k)}) + (\partial W / \partial \phi_n^{(k)})^T \delta \phi_n^{(k)}$$
 (17)

s.t. 
$$g(\phi_n^{(k+1)}) = g(\phi_n^{(k)}) + (\partial g / \partial \phi_n^{(k)})^T \delta \phi_n^{(k)} \le g_0$$
 (18)

さらに, (17) 式, (18) 式は次式のように変換できる.

min. 
$$(\partial W / \partial \phi_n^{(K)})^T \delta \phi_n^{(K)}$$
 (19)

s.t. 
$$(\partial g / \partial \phi_n^{(k)})^T \delta \phi_n^{(k)} \le g_0 - g(\phi_n^{(k)})$$
 (20)

(19) 式, (20) 式の線形計画問題を,線形計画法を用いて逐次的に解き,設計変数の更新量δφ を求める.また, δφ には次式の制約を付加する.

$$-\min[\zeta^{(k)}, (\phi^{(k)} + h)] \le \delta \phi^{(k)} \le \max[\zeta^{(k)}, (-\phi^{(k)} + h)] \quad (21)$$

ここで、*C*はムーブリミット、*h*は遷移幅を表す. (21) 式を制約として付加することで、最適化反復における大 幅な構造変化を避け、局所解に捕捉されることを防いで いる.

### (5) 密度法・レベルセット法

本節では、本論文で用いるレベルセット法<sup>(8)</sup> (LSM) 及 び密度法 (DM) とレベルセット法の併用手法<sup>(9)</sup> (DM-LSM) について述べる. LSM 及び DM-LSM では以 下の式で設計変数の更新を行う.

$$\phi_n^{(k+1)} = \phi_n^{(k)} + \delta\phi_n^{(k)}$$
(22)

ここで, k は最適化反復回数を表す. LSM に関しては, 設計変数をレベルセット関数として扱うため、(22)式 の更新後に次式を満たすようにレベルセット関数の初期 化を行う(8).

$$\left|\operatorname{grad}\phi_{n}^{(k)}\right| = 1 \tag{23}$$

なお、レベルセット法はグレースケールを界面のみに抑 える利点があるが、DM と比較して構造変化が乏しくな る. そのため、LSM の最適化初期ステップでは遷移幅を 大きくし,材料界面の変化を促す.

### (6) トポロジー最適化手順

トポロジー最適化手順を図4のフローチャートに示す. ここで、kpm は DM の総反復回数、kLSM は LSM の総反復 回数を表す. LSM のみで最適化を行う場合は kpm = 0 と する.



Fig. 4. Flowchart for topology optimization.

### 3. 最適化モデル

## (1) 解析モデル

図 5 にかご型誘導電動機の解析モデル<sup>(10)</sup>(節点数: 27,788, 要素数: 54,726) を示す. 図 5 (a) は Reference モデル,図5(b)は最適化モデルである. Reference モデ ルの寸法の詳細は文献[11] に記載されている.一次側の 三相コイルは三相交流電源と Y-Y 結線で接続されている. 固定子と回転子の磁性材料は 50A1300 を使用し、シャフ トの比透磁率は1000とした.また、二次側導体にはアル ミニウムを使用し、エンドリングを考慮した等価導電率 を用いている.図5(b)について、黄色で塗りつぶされ た領域は設計領域を表している.設計領域には周期鏡面 対称条件を適用するため、実際の設計領域は斜線で示し た領域となる.

磁界解析の条件を表1に示す.ここで,sはすべり,fは 周波数を表す.



Fig. 5. Analysis model. (a) Reference model. (b) Optimization model

TABLEI	CONDITIONS FOR MAGNETIC FIELD ANALYSIS
--------	--

$n_u, n_v, n_w$ [turn]	$e_{uw}, e_{vw}$ [Vrms]	$\begin{array}{c} R_{u}, R_{v}, R_{w} \\ [\Omega] \end{array}$	$\sigma_{ m alm}$ [S/m]	<i>l</i> [mm]	s	f [Hz]
66	100	2.92	$1.02\times10^7$	42	0.1	50

#### (2) 最適化問題

本論文では、平均トルクの向上及びトルクリップルの 低減を図る.目的関数及び制約関数を次式に示す.

min. 
$$W = \frac{1}{t_{\text{max}} - t_{\text{min}}} \int_{t_{\text{min}}}^{t_{\text{max}}} \left\{ T(t) - T_0 \right\}^2 dt$$
 (24)

s.t. 
$$g = S_{alm} - S_0 \le 0$$
 (25)

ここで、To は平均トルク指定値、Salm は設計領域のアル ミニウムの総面積を表す. So はアルミニウムの面積の指 定値を表し、reference モデルのアルミニウムの総面積と 同じ値にしている. (24) 式は定常状態の各時刻のトル クを To に近づける効果があることから、平均トルクの向 上とトルクリップルの軽減を同時に考慮することができ る. トルクリップルを制約条件として付加しない理由は, 平均トルクの感度とは別にトルクリップルの感度を計算 する必要があり、計算コストが増加するからである.

最適化ケース及び最適化条件を表 2 に示す. case a は LSM を用いた最適化, case b は DM-LSM を用いた最適化 である.  $T_0$ については, Reference モデルの平均トルクよ りも少し大きい値を採用した.

LSM のみの最適化における回転子の初期構造を図6に示す.LSM のみの最適化では、図6のように、二次側導体の輪郭と回転子の外周にゼロ等位面を設けている. DM-LSM の最適化では、全設計変数の初期値を0としている.LSM における遷移幅の変更は表3に従って行った. ここで、*h*w は最小要素幅を表す.



Fig. 6. Initial structure in LSM.

TABLE II OPTIMIZATION PARAMETERS

case	k <sub>DM</sub>	k <sub>LSM</sub>	$T_0[\mathbf{N} \cdot \mathbf{m}]$	$S_0[m^2]$	$h_w$	ζ
а	0	50	0.9	$2.86 \times 10^{-4}$	$8.4 \times 10^{-2}$	0.1h
b	50	50	0.9	$2.86 \times 10^{-4}$	$8.4 \times 10^{-2}$	0.1h

$k - k_{\rm DM}$	1~10	11~20	21~30	31~40	41~50
h	$5h_w$	$4h_w$	$3h_w$	$2h_w$	$h_w$

# 4. トポロジー最適化結果

図7に最適化で得られた構造を示す.図7(a)は case a の最適化構造,図7(b)は case b の最適化構造である. case a は LSM を用いた最適化結果であるので,現実的な 最適化構造が得られたが, case b の DM-LSM を用いた最 適化結果は二次側導体の本数が増加し,複雑な最適化構 造となった.

図8に, t = 133ms 時点(定常状態)の最適化構造の磁 束密度分布を示す.図8(a)は case aの磁束密度分布, 図8(b)は case bの磁束密度分布である.また,図9に, 同時刻の最適化構造の渦電流密度分布を示す.図9(a) は case a,図9(b)は case bの渦電流密度分布である. case a, case bともに,二次側導体が回転子の中心に寄っ たことで導体上部に磁束密度が通るようになっており, 高トルク化されたと考えられる.また,二次側導体はエ アギャップ側が細く,回転子の中心側が太くなるような 形状が得られており,電気抵抗に偏りができていると考 えられる.通常,磁束密度はエアギャップ付近に多く通 るため,二次側導体に流れる渦電流もエアギャップ付近 に集中するが,両ケースとも回転子の中心側にも流れて いることがわかる.

空気層については、case a には浅い溝, case b には深い 溝が回転子の表面に生成された.これは一次側及び二次 側導体の構造に合わせて生成されたものであり、スロッ ト高調波を打ち消すことでトルクリップル軽減に寄与し ていると考えられる.case b では二次側導体の本数が増加 し、複雑化したことで、回転子表面の空気層も深い溝を 形成し、複雑化したと考えられる. 図10にトルク特性,表4に最適化結果を示す.設計領 域のアルミニウムの総面積は両ケースともリファレンス のそれを僅かに超える結果になった.これは、レベルセ ット法では、制約を無視してレベルセット関数の初期化 を行うからであると考えられる.両ケースとも、平均ト ルクはトルク指定値として設定した 0.9 N・m 付近の値と なり、トルクリップルは case a では 59.7 %, case b では 67.3 %低減され、トルク特性の大幅な向上に成功した.



Fig. 7. Optimized structure. (a) case a (with LSM). (b) case b (with DM-LSM).



Fig. 8. Magnetic flux density distribution (t = 133ms). (a) case a (with LSM). (b) case b (with DM-LSM).



Fig. 9. Eddy current density distribution (t = 133ms). (a) case a (with LSM). (b) case b (with DM-LSM).



Fig. 10. Torque characteristics

 TABLE IV
 OPTIMIZATION RESULTS

case	$T_{ave}$ [N·m]	$T_{rip} [N \cdot m]$	$S_{\rm alm} [m^2]$	elapse time [h]
Ref.	0.878	0.382		
a	0.904	0.154	$2.88 \times 10^{-4}$	42.1
b	0.894	0.125	$2.87 \times 10^{-4}$	88.2

# 5. 結論

本論文では、磁界・電圧源強連成解析に基づくかご型 誘導電動機のマルチマテリアルトポロジー最適化を行い、 高トルク化、低トルクリップル化を図った.

トポロジー最適化から得られた構造では、エアギャッ プ付近の二次側導体が電気抵抗を増加するように細い形 状に変化した.また、トルクリップルを軽減するように 回転子の表面に空気層が生成され、浅い溝ができた.

密度法とレベルセット法の併用手法を用いて得られた 最適化構造について、二次側導体の本数が増加するとと もに、エアギャップ付近の二次側導体が細い形状に変化 した. 導体の本数が増加した分、回転子表面の空気層に よる溝も増加し、深くなったと考えられる.

平均トルクはトルク指定値通りの 0.9 N・m 付近の値と なり,トルクリップルも 59.7%~67.3%低減されたことで, トルク特性が大幅に向上した.

#### 研究業績

- (1)平田竜一朗,岡本吉史:「磁界・電気回路強連成解析にお ける時間領域随伴変数法の省メモリ化に関する検討」,電 気学会静止器/回転機合同研究会,SA-23-020,RM23-020, 神奈川,3月,2023.
- (2) R. Hirata, Y. Okamoto, "Reduction of Memory Consumption in Time Domain Adjoint Variable Method for Induction Motor Design Using Topology Optimization," The 24th International Conference on the Computation of Electromagnetic Fields COMPUMAG 2023, May 2023.
- (3)平田竜一朗,岡本吉史:「磁界・電気回路強連成解析基づくかご型誘導電動機のマルチマテリアルトポロジー最適化」,電気学会静止器/回転機合同研究会,SA-23-020, RM23-020,神奈川,3月,2023.

#### 参考文献

- (1) 経済産業省大臣官房調査統計グループ:「経済産業省生産 動態統計年報機械統計編」,経済産業省(2021)
- (2) 総合資源エネルギー調査会,省エネルギー基準部会,三 相誘導電動機判断基準小委員会:「最終取りまとめ」,経済

産業省 (2013)

- (3) S. Park, S. Min, S. Yamasaki, S. Nishiwaki, J. Yoo, "Magnetic actuator design using level set based topology optimization," *IEEE Trans. Magn*, Vol.44, No.11, pp.4037-4040 (2008).
- (4) M. Yamano, K. Katayama, Y. Okamoto, "Sensitivity-based topology optimization of squirrel-cage induction motor in time domain using multi-material level-set method," *IEEE Trans. Magn*, Vol.58, No.9, Art. ID : 8205904 (2022).
- (5) 中田高義,高橋則雄:「電気工学の有限要素法」,森北出版 (1982)
- (6) Y. Yamashita, Y. Okamoto, "Design optimization of synchronous reluctance motor for reducing iron loss and improving torque characteristics using topology optimization based on the level-set method," *IEEE Trans. Magn*, Vol.56, No.3, Art. ID : 7510704 (2020).
- I.-H. Park, I.-G. Kwak, H.-B. Lee, S.-Y. Hahn, and K.-S. Lee,
   "Design sensitivity analysis for transient eddy current problems using finite element discretization and adjoint variable method," *IEEE Trans. Magn.*, Vol. 32, No. 3, pp. 1242-1245 (1996).
- (8) S. Yamasaki, S. Nishiwaki, T. Yamada, K. Izui, and M. Yoshimura, "A structural optimization method based on the level set method using a new geometry-based re-initialization scheme," *Int. J. Numer. Methods Eng.*, Vol. 83, No. 12, pp. 1580-1624 (2010).
- (9) 山下祐輝,子田陸,片山一哉,岡本吉史:「密度法・レベ ルセット法の段階的使用による IPM モータのマルチマテ リアル構造最適化」,電気学会論文誌 D, Vol.141, No.9 pp.729-737 (2019)
- (10)回転機のバーチャルエンジニアリングのための電磁界解 析技術調査専門委員会:「回転機のバーチャルエンジニア リングのための電磁界解析技術」,電気学会 (2000)